

4 寛政二年『花供養』

底本 愛知県大

## 花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

花を捧、香を捻り、やよひの  
忌日をさだめ、祖翁の像前  
に風雅をいとなみ給ふこと  
年あり。人々つらなり給ひ  
ける中にも、ことしはその巻  
のおもきをになふ。もとより  
辞す事にあらねば、年毎  
の誓をなしていへらく明年

此事にあたらん人は、予がごとく是をおそれず、予がごとく是を序して、その席を退く事なかれ。師もまた此言をわらひて供養の規矩にさだむ。

寛政二戌とし

朝の花しづかに煎茶奉る

此日したふは皆桜人

富は世のかげろふものとかいやりて

白鷗なんどはなされにけり

薬掘けはしき山をかけめぐり

桂柱の露の東屋

誰もなく月三更にかたぶけば

羅水

闌更

鉄翁

南栄

車蓋

亀渕

桃睡

かしこく召さる土器の味噌

嘉菊

鎌倉に気を沈れば波の音

百池

人に贈りし琵琶をおしむか

魯長

右百韻下略

此頃の小雨薫りてはつ桜

瓜坊

葉広になりぬ春の山檜

駒山

鶯姫の顔見せに来る朝／＼に

、

空色衣襟なみだしぞ

輦に女童の五六人

萩もあらはに苔のすゞしき

音ばかりきこえて瀧の静なる

月を頼みの寝蔭ひろげて

蟪蛄の琵琶に向ふぞおかしけれ

あて事もなき今参との

腹減しに直の松原粧坂

祈るを神も笑ひ給はん

坊、山、坊、山、坊、山、坊

ちりかゝる木の葉の雪の白幣

蓬家の煙たへずも有哉

子をぬすむ人の心ももつれ髪

地獄の闇のいかに春の夜

ほの／＼と花を明石のさゝげ草

霞の千鳥磯の陽炎

山 坊 山 坊 山 坊 山 筆

青空にとめてさくらの梢かな

不朽

見つくして口そよぐ谷の桜哉

渭川

花に来て摘ものすなり青女房

虎白

嘘つきの口をつぐみし桜哉

凡二

坊の花や天狗礫の跡もなし

曾陸

夕風や花にふるびし油筒

蓮車

誰が絵の是にもぬけん桜花

山暁

ちさい木もよしと花見るふたり哉

言道

眠けり花にかまはぬ雨のくれ

長広

天地や我もかまはぬ花の春

曇水

凧あげる子をすかしけり花の主

思情

ゆふぐれや川もさくらの嵐山

魯貢

切株に四五輪咲て山ざくら

得終

八重桜かくちるものと見ざりけり

薰河

関守も花にはゆるせ宵の闇

珠鳴

雨の花めくみの中に哀あり

嘉菊

欲ふかき人の出る日や花ぐもり

土卵

花ちるやきいと仏間の折障子

潮路

花ちるやきのふを夢に二日酔

孤秀

渦し水にうつるや花筏

長甫

魚くさき袂ふりつゝ花の中

古塘

花に来て我ふつゝかの見えにけり

梅斜

三度来しけふぞ桜のあぶれ口

月峰

ゆふ山や雲のかしらを散桜

南栄

ちる跡は人の花なりひがし山

杜桂

雨ばれや谷間に白き庵の花

一二三

跡見ればなれし桜や薄曇

私青

先春の筆おさむるやちる桜

百鳥

またゝきもならぬ山路の桜哉

車草

そぼく／＼と花もちりけり雨の花

青芽

嵯峨に寝て月にとはるゝ桜哉

山尾

三代の花ぞゆかしき座敷かな

桃柳

花や咲石碑を建て帰る人

観水

、  
花見人所さだめのいそぎ哉

桃睡

花の主下戸とはさらにおもはれず

一峰

翌の人のしらぬ昔や山桜

百池

、  
見ゆるなり遠山里の花ぐもり

都雀

藤橋を苦もなく越つ花の時

志諺

、  
花浴て山鳥さりぬ谷間より

紫暁

家土産の花に門戸を開きけり

倭泉

、

花七日あるは月の夜雨の暮

定雅

順に咲花に日和の加減かな

在貫

四五日の顔近付や花の中

山之

蝶ならば朝夕とはむ花の庵

楚梁

、

芭蕉堂に桜木を奉りて

あはれ幾世花の台に冥加あれ

嵐月

誰ために竹にかくれて遅桜

管鳥

ゆふ桜白がねちらすたぐひ哉

其成

、

まのゝ江やある夜桜にながれ星

眉山

世わすれに來たれば花の移る哉

車蓋

、

糸桜鞞にかゝる御遊かな

山城

真爰

半ちる花の後の夜道哉

下方

花の香に夢おもひ出すあゆみ哉

麦子

花の山月より花のわかれかな

衣翻

、

わりなさをうたれ狂女や花の瀧

黄口

坂の花禿のころぶ午時の風

梅英

二日遅し花に三日の届状

芦雁

ちる桜またこぼれけり狩衣

玉慶

あらましに花見て過ぬ西東

鬼薊

ちる花のほとりを杣の日たゞ樵る

魯長

、

山陰や猪の吹まはる花のもと

百喙

桜守ながめあまりの眠かな

宥深

開帳や花見てくらす人多し

寛算

うちかすみまばゆき花の御室哉

素川

、

月の輪の月に雨降桜哉

松風

難波女の見て居る花の後哉

礧水

初花やよし野を出る古手買

柏葉

花の中に物食ふ人のあちら向

巴喬

分入て花におぼるゝや芳野山

梁園

、

ちりの中桜咲日を子にうらむ

丹波

あふひ

染色のおとこ女にちる桜

はこふ

静なり花の中なる桔槔

其岱

くろがねにかゝる大手の桜哉

文樵

うき島や危き上のはつ桜

乙路

花咲て人の狂はぬ里もなし

思月

ゆふ影の里を過けり峰の花

静為

花咲て女房のうらみ聞日哉

くれを

青くても赤くてもよし花の野辺

洞々

花ものいはず我も往来の数に入

大津

未角

はな年／＼次第にきゆる鐘の銘

巨洲

花こゝに都の西のかぎりかな

五来

出ぎらひの人うたせばや花の灌

井子

つくねんと我独なり山ざくら

楚南

静さの田井に花食ふ鯨かな

玄兎

立よれば竹の秋あり嵯峨の花

一萍

君徳のうるはしきは賢臣の

補佐によれり

夜桜の風情をもゆる篝かな

近江

潮花

花ひとへ嵐の下に咲そむる

蜃州

初花やくもり月夜のこゝかしこ

可石

なまめきし声もきこへてくれの花

青楓

暁や花のかたより鳥の声

江舟

ちる花や井戸に舞込奥の坊

鉄翁

興尽て若衆寝にけり花のもと

亀洩

桜木も月に並びぬ如意宝珠

青牛

いき甲斐のあつて桜に旅寝哉

柏由

蝶／＼はさすがに來たり初桜

如毛

藁馬や花に引ずる御乳母人

錦月

明まつや桜見そめし夜の夢

湖亭

花守の守隙もなきさかり哉

其交

夜桜や狐出て嗅酒の跡

梨風

風流の曲ものおほし桜かげ

酔月

仏には障子一重のさくら哉

千鶚

広沢や花と山との波がしら

りき

門内や人に摺たる花の塵

吟呂

誰跡か花の径の匂ひせり

李明

朝の花寝巻の袖の弥古し

花橘

埒もなき味曾すりこぎぞ花の中

周路

うとく／＼と花の中より登る日ぞ

暁宇

行違ふ人何者ぞ花くさし

千羅

花の日や坊から指し小脇ざし

歌雄

宵の雨けふの花見の盛哉

二浪

狗の子や桜がもとに身をふるふ

一之

夜桜や千金もたぬ身の果報

瑳雀

庵かりて乳呑子寝さす花見哉

専児

花供養くれなば月も見え給へ

圃丈

、

興尽ぬ花に杯なげくれむ

イガ

一応

桜見や茶に行当る所まで

一如

花陰や芝に伏たる下部ども

岷靈

水茶屋の薄縁青しはつ桜

思竹

浦山や散来る花を帆にはらふ

五麗

、

三月十二日芭蕉堂に此

会の興行にまいりあいて

群徒の数に入ばや花供養

勢州

清秋

わらうだに花の主を見る日哉

鼠洛

蛤の気は吹きえてゆふ桜

幡水

はつ桜我もの云はず風ふかず

霰打

指折の日をまゝならね雨の花

蘿道

年毎に老を知る花の歩み哉

寄峰

花咲て珠簾浅き風情哉

甘谷

余念なき身にも報ふか花曇

珉山

花をわれにけなげなものゝくれにけり

能寺や女房も持て山ざくら

、

天下る乙女もあらむ花の雲

雨の日や遠山もとの花黒し

羽織着て遊びの戻る花見哉

夜桜に御遊の灯うつりけり

、

桜花王一姓の国もなし

支朗

無曲

雁路

杜影

吾友

銀袋

若州

巨川

曙や花の波くむはね釣瓶

東鳥

酒二石うりて花ちる小家かな

陶河

山下りて桜がもとの放下見む

百馬

獣の栖をかゆるさくらかな

柳支

花のもと立て寝に行鳥かな

希由

琵琶の音もきくや御室の花盛

其堂

骨食し犬匍匐や花のもと

呑空

降らばゆきて小袖にしめむ花の雨

吐雲

七日とは誰がかぎりてやちる桜

鬼雀

雨催ひ灯に見む夜の花

悦溪

山を出し雪解に花の道くさし

之丸

花の流掬してはおしみくけり

五鼎

人によけて花見る幕や小長刀

波静

酔ざめや花につかれて嵯峨泊り

魚春

山寺や砌に高き八重ざくら

一川

何とのふつく息高き花見哉

東考

花植て置土乾く日和かな

柳子

暮にけり是から奥は翌の花

烏甲

立よればわれうつくしき花の下

一巴

朝曇晴ゆく花の雫哉

李牧

あるが中にやさしき一重桜哉

馬仏

こゝろから音ある花の雪吹哉

兔文

目ざましき黄昏時や花と人

馬來

花過て暫淋し京の町

能登

珠卜

花咲て醍醐小栗栖朝曇

素玉

楽やきのふの花を夢に見し

都山

花の香や薰ものさそふ御簾の前

文遊

熊の子を見る人もあり山桜

怡水

奉公のはげしき中を花見哉

文玠

一日は散を見に行きくら哉

玻井

翌日からは麓の茶屋に花見哉

馬涼

花しら／＼戸ざして夜の眺かな

文朝

待かねて花見に出るひとり哉

加由

ゆく水を恨て見たり散桜

珥丘

盃に蝶の名残やゆふざくら

嵐峰

花守やふるき桜の物がたり

李友

雨の日や親子が花の物語

麦秀

うら住やかかれて出る桜狩

暮臘

くるゝ日や花の光のたゞならず

岸芷

齒をそめた男来にけり初桜

梅眠

こけ落て花盗人のわらひ哉

越中

杜市

雪駄にも泥の付たりはつ桜

緑水

花照るや山／＼わたる雲の形

璧斗

、

初桜ちるや湯立の煙る空

大坂

尺艾

花の中に育てうるや蕨もち

画涼

傘も出しきる雨の桜哉

夢友

花か我か嬉きうかれごゝろかな

江涯

、  
花 落 る 声 や 日 ぐ れ の 嵐 山

和 州

可 翠

三 尺 の 花 に 深 山 の に ほ ひ 哉

三 楽

、  
酣 に 花 降 か へ る 天 窓 か な

芦 雪

、  
花 守 の 果 は 鶴 に も 乗 人 か

紀 州

海 牛

花 咲 や 十 日 の 雨 も 雲 に の み

魯 水

こ へ ろ ある 膝 行 車 や 花 の 影

播 州

君 中

花咲や石の竈もふたつみつ

紫燕

苔衣今も八千代のさくら哉

五水

雨ばれや雲も桜のはなれ際

観水

遠近の酒に酔たり花の主

百和

三月や家を出れば花の人

寒鴻

、

麓から夜は明にけりはつ桜

備中

南枝

花桜一木持けり俗聖

備後

何笠

たしなみや花に間に合ふ摺火打

李朝

箱根八里乗掛遅し初桜

花毛

ちる桜見事や残るゆふ日まで

馬杖

白妙や峰も麓も花雪吹

一島

ちる花や風にゆられて月薫る

午琴

咲ばこそ散事おもふ桜かな

瓦二

二三畳寝所ほしき桜かな

右汝

うかれ女や灯かげろふ夜の花

古声

山桜たゞごと歌の姿かは

芸州

東吹

菅笠のつゞく路あり花の山

金竟

峰つたふ山伏ゆかし花の頃

可友

われが身のしづこゝろなし散桜

凡十

轟や花の御幸の牛車

雲州

龍尾

ほろつくや咲日となりて花の雲

石州

鳳沖

雨の日やふり向がたにちる桜

志山

明がたや桜にこもる鐘の声

鹿鳴

庵かりて住たき花の山辺哉

如珪

風もはやすゞろになりて桜ちる

吐阿

花なくばいかに住べき谷の庵

嵐峰

出かり屋に宿の無心や桜時

甫山

あの谷の霞はいかに峰の花

雨山

花にさへかくぞうき世の夕嵐

見漁

造り木はすてゝ見に行桜哉

里暁

此日和蝶も出る日ぞ初桜

藤紫

千々に物おもふ日ぞなし花盛

如蕙

市中や子供くづれる花の枝

阿州 蓼花

こゝろよやそゞろに酔て花の雨

長州 花密

御姿に色香たがへぬ桜かな

湖水

山蜂や花ついくゞり／＼

白遊

都辺やゆふべ音なく花の散

比雪

跡ながく休む花見のそなへ哉

麦子

守人や旦を名残る花の跡

女 ます

散花に灯ほそきすまゐかな

里芳

花なれや天上人の手になれし

楚柳

おもほへず花見る里に野宿せり

里梅

花守に酒まいらせて詠め哉

鉄寿

昨日よりけふ猶花のよし野山

南江

世を軽く花の片荷の瓢哉

吳溪

埋れて花に昼寝の乞食哉

薰里

花守といざふたり寝ん夜は月夜

豊前

渭水

無事にして一期花見む願哉

木腸

人恋し鼠花食ふ宝寺

夏夕

山の辺や公泥障して花の雲

南明

、

花の後浮世に戻る気のつかず

筑前

笋里

汐木とる妹に落けり花の雲

帰来

誰の建し庵ぞ花の老にける

塙山

鶯の桜になくや鄙ぐもり

藍江

朝ばれや月ふるふ鳥の花の枝

君花

峰の花薄着をけふの手柄哉

肥後

柿青

坊が妻魚食ひに里の花見哉

箕溪

なまなかにひとり花見ぞ心よき

蔦路

あれにしも桜は咲や奥芳野

清壺

花の枝にかけし風折烏帽子哉

化仙

御陵や都にむかふ花の中

文暁

たまさかや花もてとはむ妾がもと

豊後

磨牛

此頃や花の上ゆく人ごころ

肥前

車文

いつ花に遊ぶべきものか雨の酒

文塘

病中辞世のこころにて

夢中に唱ける

花山遊び得て今かへる也

遠州

白輅

谷はまだ水音細しはつ桜

魯雀

ゆかりある僧に逢けり花の山

知白

下臥や桜の中の花のゆめ

約我

、

かくし田や一里は皆遅ざくら

尾陽

羅城

はつ桜どちらが先ぞ須磨明石

濃州

佳乙

、

山桜こゝろおよばで分入らず

甲州

可都里

うしろめたく余所へもちるや家桜

作良

ゆふ月や花に誘るゝきのふけふ

美敬

めづらしや桜簾手に松くるゝ

樗冠

ゆふ桜誰千金の山のぬし

漢甫

、

箱根路や明て桜の朝ぼらけ

上州

朔宇

夜桜や提灯提し樽拾ヒ

上州

専車

ちる花や荒し伽藍の仏達

信濃

雲帯

人声に瀧をうち消す桜哉

武州

鳳爪

石加減に石のぬくみや山桜

仙風

久堅の日は静なりちるさくら

下州

楚流

夜桜や峰は弥生の天の川

赤卒

花あればこそ夕ぐれを忘れけり

水戸

石窓

日盛の花は満たり山ざくら

羽州

露橘

貧しきをこゝろの花のしをり哉

奥州

吏仙

翌の花日和請合ふ上戸哉

吾舟

ちる花を悲しむ思ひ雲となるか

青蘿

島の花雨に舟なきうらみ哉

五齡

見尽さば桜も春の影法師

鷺山改 駟山

ひとりづゝ

桜さだむる御室かな

闌更

花に出て花におくれける

をあはれみ東山なる桃

青堂の翁、花供養

の後にゆるして初夏の

句をすゝめ給ふに

ほととぎす誠の初音聞日哉

花はふりゆく卯月野の雲

飛／＼に小家間近く潮満て

干和布をしがむ顔下司気也

龍爪

闌更

朔宇

古塘

撰れし猿は衣着る名月に

何笠

招きまねける薄幾もと

渭川

秋の末炭誂へに小野へ行

其成

六つとこたへる子を拾ふたり

一峰

朝夕に仏の食のくひあまり

真菅

大樹をうづむ白雲の中

松風

鴉てふおよそ鳥など飛もせず

あふひ

君待日数指にまぎるゝ

平吞

月寒く顔にたれたる額髪

珠鳴

夜の戸をうつ舟の上り場

言道

愛らしき狗どものよろめきて

蓮車

若侍の隙倦るさま

不朽

飛鳥井の御殿の花の色移

長広

いとゆふといふものはあれかや

得終

かたはらに蚕の煮殻悪くさき

在貫

乳兄弟とてもてなしにけり

山暁

勘七が夢ときえしも五六年

陀仏

合歡堤の崩がちにして

楚南

気色よく見わたすかたは磯馴松

志諺

高陽の徒とわれをいふらん

凡二

此度の女房も最早帰るまじ

眉山

おとゝひからのもぞふれる雨

一二三

奇特見る瀧の下なる籠堂

梁園

美人を縛る病有けり

鬼薊

風起雲起る月のさだめなき

曾陸

藻に鳴虫の浮沈つゝ

薰河

囚れて秋やしるらん夷ども

山尾

かたりて見れば世に鬼はなき

観水

たと紙に高野の土砂をうちちらし

私青

清き岩根の水汲て来よ

土卵

匍匐しうなじへ花のちりかゝる

雲帯

箕踞せし人も酔どれの春

麦子

追加

かざし行花よけてやる径哉

近江 陀仏

暮るとも道凌からぬ桜かな

越中 不石

見つくして蝶にとはゞや花の味

沙文

のり捨し駒を棊に花見哉

千友

雨の花我か身の罪をおもはるゝ

イセ 帯川

寛政二庚戌年春三月

京三条通御幸町西

蕉門書林

菊舎太兵衛梓

(二二二ウ・25)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)